

作られた不安

浅野 則子

はじめに

安心して生活できる空間から出ていくことは、たとえ、そこでの景色が美しくても、それは、古代人にとって、大きな不安であった。古代人は、日常の生活空間から離れることは境界を越えて、異郷、つまり、守ってくれる神がいな場所身を置くことなのである。その空間の移動を旅と呼ぶ時、こうした意識は、旅の歌を作っていく。

都に身を置く万葉の人々も、日常空間としての都から出て行く時に旅の歌を歌っている。安定した都での生活から出て旅をするのは、多くは官人であるが、彼らは、その社会的立場のもとに旅に出ることを余儀なくされ、そこから、日常の空間を思う。戻れることを前提としつつも、歌の根底にあるのは多くは不安であり、律令国家の一員としての立場と、生活空間を意識した私としての心情が織りなす表現といえよう。

こうした万葉の旅の歌の中で、女性である坂上郎女が歌った歌がある。「夏四月、大伴坂上郎女の、賀茂神社を拝み奉りし時に、便ち相坂山を越え、近江の海を望み見て、晩頭に還り来て作れる歌一首」という題詞をもち、

木綿豊手向の山を今日越えていづれの野辺に廬せむわれ

六一一〇一七

というものである。坂上郎女は、女性としては、歌の種類が多岐にわたっているというのが一般であるが、この歌を当時の旅の歌の中に置いて考える時に、そこには、どのような意識がみられるのだろうか。都という空間に身を置く女性、坂上郎女にとつての旅の歌を読むのが小稿の目的である。

一

坂上郎女は、当時の女性としては、珍しく、長期の旅の経験をもつ。それは、兄である旅人が大宰府長官として赴任したおり、妻を失った時に、その立場を求められて下向し、旅人がやがて、大納言となつて都に戻るに先立ち、大宰府から都への帰路の歌があることで明らかである。歌を記してみよう。

①大汝 少彦名の 神こそは 名づけ始めけめ 名のみを 名見山と負
ひて わが恋の千 重の一重も 慰めなくに
②わが背子に恋ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ恋忘貝

六―九六三・四

①は「冬十一月に、大伴坂上郎女の、帥の家を發ちて道に上り、筑前国の宗像郡の、名見山を越えし時に作れる歌」、②は「同じく、坂上郎女の京に向ふ海路に浜の貝を見て作れる歌一首」と、いう題詞を持つものであり、大宰府からの帰路ということがはつきりしている。題詞では、旅であることを記しているが、①の歌は「名見山」そのものではなく、「なぐ」とつながる「なご」という音を持つ山の名前にひかれて歌ったものである。

そこには、山の様子もなく、また、日常を超えた場所の物という表現も強く現れてはいない。歌の表現の中心は、恋心が慰められないということになるだろう。したがって、この歌は、旅先のものでありつつも、その表現は恋歌と変わることがない。また、②の歌は、「暇あらば拾ひに行かむ住吉の岸に寄るとふ恋忘貝」（七―一四七）という類歌をもつとされる。類歌は作者未詳であるが、「住吉」と歌われるように、官人の住吉への行幸従駕のおりものと考えられる。旅先で「恋忘貝」を拾う官人は、「暇あらば」と自らの立場を出すことで、自由にならないことを歌い、それ故に残して来た人への思いを「恋忘れ貝」に託したいとするが、これは、官人たちの旅の歌のパターンといえる。ここで坂上郎女は同じ「恋忘貝」を求めつつ、さらに、「わが背子に恋ふれば苦し」と歌い、旅を歌うことよりも、自らの恋心を強く出すのである。坂上郎

女の旅の歌は、当時の女性としては、珍しい長旅を経験しつつも、表現は、恋歌の形であるといつてよいであろう。言い換えれば、日常の空間から離れた不安というものは、表現されていないことになる。大宰府から都へという、当時としては希有な体験をしながら、その時点で、坂上郎女は、日常を離れた空間としての旅を特に取り立てて歌うことはしなかった。それは、恋歌の表現の中に入り込んでしまうものでしかないのである。

日常の生活空間である都の家を離れて歌うという点では、坂上郎女は竹田、跡見という田庄に行つたおりのものもある。「大伴坂上郎女の跡見庄より、宅に留まれる女子の大嬢に賜へる歌」（四―七二三・四）、「大伴坂上郎女の竹田庄より女子の大嬢に贈れる歌」（四―七六〇・一）、また、季節毎に分類されている巻八では、秋の雑歌に「跡見庄にして作れる」（二五六〇・一）、「竹田庄にして作れる」とする歌（一五九二・三）を見ることがができる。巻四の歌は題詞にあるように、都に残した娘の大嬢への思いが中心である。都への思いということでは、旅の歌の要素を持ち得ているが歌の中では、家から遠くはなれているために、娘のことを思ふということは表現されていない。つまり、ひとりである娘への不安を歌うことが主体であり、自らのいる空間への不安感はないのである。巻八の雑歌では、一五九二の歌は、「然とあらぬ五百代小田を刈り乱り田廬に居れば都し思ほゆ」と「都」という空間が提示され、そこにいない自己が明らかになつていく。その点では、確かに旅という要素がとらえられるものの、場所は、自らの庄がある土地である。それは、日常とは異なつた空間であつても、決して、いることに不安を感じる場所

ではないはずである。ここでの土地は、自らと関わるもの、さらには、都と続く場所といってもよいであろう。巻八の他の歌では、それぞれ「秋」「鹿の声」「黄葉」が歌われる。題詞を見る限り、それは、「竹田」「跡見」の景ではあるが、都で見ることのできる秋の景と重ねているということができ、その土地の独自性をみることはできない。

こうして、坂上郎女の歌の中で、日常空間を離れた歌をみていくと、そこでは、確かに実体としての移動はあるものの、坂上郎女が歌った表現意識の上では、都での日常の歌と大きく異なる表現は用いていないということになる。実体はおくとして、歌の中での旅というのは、恋から切り離されてはいないのであった。こうした点を考えつつ、問題としている歌にもどっていききたい。

二

歌では、まず、今いる場所が示される。それは「木綿疊手向けの山」を越えた場所であると歌う。題詞によって、「手向けの山」とは「相坂山」であることがわかる。この「相坂山」は歌の表現においては、歌枕となつて、古今集以降は、多く「逢坂山」と記され、その「逢」という言葉から、多くは恋歌に使われるが、万葉集においてそのような歌われ方をするのは、次の二例にすぎない。

③吾妹子に相坂山のはだ薄穂には咲き出でず恋ひ渡るかも

十一二二八三

④吾妹子に逢坂山を越えて来て泣きつつ居れど逢ふよしもなし

十五一三七六二

③の歌は、巻十の秋相聞のうち「花に寄せたる」にいられている。「相坂山」にある「はだ薄」と歌われ、実際の薄の姿よりも、「相坂山」という名を持つ山にあるが故に恋歌の表現にとりこまれたといえよう。次の④は、中臣宅守と狭野茅上娘子の贈答歌のうちの一首で、中臣宅守のものである。宅臣は越前に配流されたとされるが、越前への行程で、「逢坂山」は通るものの、「こ」でも「逢ふよしもなし」と言う言葉と対比させるための「逢う」という名をもった「逢坂山」であることは明らかである。こうして、万葉集において、その名のうちの「逢」という部分のために、恋歌の表現に使われるものもあるものの、その数は多くはない。

「相坂山」は、『日本書紀』によれば、大化二年正月（六四六）、詔で「北は近江の狭々波の合坂山より以来を畿内国となす」と定められた場所であった。すなわち、ここを越えれば、畿内ではないという場所としてとらえられる山であり、都人にとっては、異郷といつてもよい。坂上郎女が「手向けの山」と歌うのもこうした理由による。この意識は万葉集の先の二首以外の歌に現れているものと考えられる。具体的にみていくことにしたい。

⑤そらみつ 倭の国 あをによし 奈良山越えて 山城の 管木の原
ちはやぶる 宇治の渡り 滝屋の 阿後尼の原を 千歳に 欠くるこ

となく 万歳に あり通はむと 山科の 石田の杜の すめ神に 幣
帛取り向けて われは越え行く 相坂山を

十三―三三二―三六

⑥あをによし 奈良山過ぎて ものふの 宇治川渡り 少女らに 相
坂山に 手向草 幣取り置きて 吾妹子に 淡江の海の 沖つ波 来
寄る浜辺を くれくれと 独りぞ 我が来る 妹が目欲り

十三―三三二―三七

⑦相坂をうち出でて見れば淡海の海白木綿花に波立ち渡る

十三―三三二―三八

⑧大君の 命畏み 見れど飽かぬ 奈良山越えて 真木積む 泉の川の
速き瀬を 棹さし渡り ちはやぶる 宇治の渡りの たぎつ瀬を 見
つつ渡りて 近江道の 相坂山に 手向けして わが越え行けば 衆
浪の 志賀の韓崎 幸くあらば またかへり見む 道の隈 八十隈ご
とに 嘆きつつ 我が過ぎ行けば いや遠に 里離り来ぬ いや高に
山も越え来ぬ 剣太刀 鞘ゆ抜き出て 伊香胡山 いかにか我がせむ
行方知らずて

十三―三三二―四〇

これらの歌は、すべて、作者未詳の長歌の巻である巻十三にのせられ
ているものであり、近江関係として並べられているものである。⑤⑥⑦
の歌は、「右は三首」と配列上でひとまとまりにされており、⑥はその
歌の前に「或る本に曰はく」と書かれていることから、⑤の類歌として
とらえられてここに収録されたと考えられよう。⑤の歌では倭の国から
境の山である奈良山を越えて、山城に入り、そこから宇治へという道行

の表現がとられているが、その旅の目的、歌われた時代はあきらかにで
きないものの、公的な旅に出た官人が、旅の要所を歌い込むことで、安
全を願うものと考えられる。そして、その先の目的の場所を具体的に

「淡海の海」とに歌うのが⑥の歌といえよう。⑥の歌は、⑤の歌と奈良
からの地名を連ねるといふ点では、類似の表現を持つが、⑤の歌が「千
歳に 欠ける事無く 万歳に あり通はむと」と言つて公の旅の歌とし
ての部分を強調するのに対して、地名の「相坂山」を「少女らに」とい
う枕詞で導き、次の「淡江の海」の枕詞も「吾妹子」であるように、恋
歌の要素を持ち、末尾の残してきた「妹」への思いへとつないでいく。
つまり、⑥の歌は別れが中心であり都との距離は、その心情のために強
調されている。更に、⑥の旅の締めくくりとして淡海を歌うのが⑦であ
る。ここでは、近江という土地の遠さや、旅の不安よりも、境の山とし
て手向けする「相坂山」を越えて、畿内の外である近江へ来た時、その
近江の景物を褒めるといふ形をとる旅の歌であると思われる。

次の⑧の歌はまず「大君の 命畏み」と歌い、その旅が官人のもので
あることを明らかにしている。奈良山を越え、泉川、宇治と進み、「相
坂山」を越えるというように地名を連ねた道行きの表現を使うのは⑤、
⑥の歌と同じであるが、この歌は、さらに旅を進めて、「伊香胡山」を
越えるというのである。官人の旅であることを歌いつつも⑤の歌のよう
な職務への喜びはなく、作者の目は都との距離を測り、嘆きに終始する。
「相坂山」を歌うのは、奈良から近江への道行きの歌に多く、歌の中
で、多くの地名によつて、その遠さが記されるように、都人の近江への
旅に限られ、しかも、それは、畿内を出るといふことが強く意識される

ものである。坂上郎女もまた、手向けをする山と歌うことで、こうした歌と同様に畿内ではないということを表示しているといってもよいであろう。

さらに、歌をみていくと、旅先の近江は⑥の歌では「くれくれと独りそわが来る 妹が目を欲り」と、ことさらに心の暗さを歌い、⑧の歌は、最終目的ではないものの「相坂山」は「嘆きつつ」越えていく場所となっている。こうした「相坂山」を越える歌には、⑤の歌のように職務への期待、⑦の反歌の、「淡海の海」の具体的な様子もあるものの、心情表現は、旅の不安が中心であるといつてよい。それは、畿内の外に出るという意識によるものであろう。

都から近江への旅を歌う歌を見てきたが、近江とは、都人にとってどのように歌われたであろうか。近江という地名は、旅の歌として扱われる時、「近江旧都」とされることもある。それは、人麻呂の「近江荒都」(二―二九〇三二)に代表されるように、壬申の乱で廃墟と化した近江京への思いを歌ったものである。人麻呂は「荒都歌」以外にも「近江の国より上り来たりし時に」という題詞を持つ歌(三―二六四)がある。また、この人麻呂の前には、素性が明らかではない作者、刑部垂麻呂の「近江の国より上り来し時に」という題詞を持つ歌(三―二六三)がある。さらに高市黒人の歌(二―三二〇三三、三―三〇五)をみることもできる。これらは、いずれも限られた時代に作られたものであり、その後にかこうした発想の歌をみることはできないが、時代が下っても、「近江」という地名に都人が感傷的な感を抱いていたということではあるであろう。

「近江」という地名について見た場合、こうした歴史的な背景をもたずに、単にその地名のみで歌われるのは、ほとんどが「近江の海」というものである。

⑨ 淡海の海波かしこみと風守り年はや経なむ漕ぐとはなしに
七―一三九〇

⑩ 淡海^ノの海奥つ島山奥まへてわが思ふ妹が言の繁けく
十一―二七二八

⑪ 近江の海湊は八十いづくにか君が船泊て草結びけむ
七―一六九

⑫ 近江の海 泊八十泊あり 八十島の 縞の崎崎 あり立てる
—— (以下略)

十三―三三三九^註

右にあげた歌の中で、⑨は「海に寄せる」という分類による。そして、この歌は比喩歌であり、「波かしこみ」と歌い、波がおそろしくて、逢えないことを嘆く表現となっている。次の⑩も比喩歌であるが、ここでは、沖の島が歌われ、心の奥に秘めた思いと重なっている。⑪、⑫の歌は、そこに多くある湊がうたわれ、⑩の歌では、旅する相手の宿りを感じる歌である。このように近江の土地とは、都人にとって「海」と呼ばれるように、広い水面を持つ琵琶湖として歌われる土地であったと言える。実体としてそれが湖であったとしても歌の中の感覚は「海」と同じものとして扱われていたはずである。しかしながら、同様に海への旅の

歌である住吉が、その海辺の様子を多く歌うのに対し、先にあげた歌の中で不安を歌っていることに注目したい。近江への旅というのは、畿内の外ということなのであり、海の様子よりも、異郷としての不安が先立つのであった。

旅の歌としては、すでに住吉での官人の歌との類似表現を持つ歌を作り得た坂上郎女にとつて、こうした地名への興味は、旅の歌の中での、また、異なつた表現への興味と結びついていったみてよいであろう。坂上郎女は、そうした意味をもつた土地をあえて、歌の中で「廬」する場所として選ぶのである。

三

問題としている歌では「手向けの山」である坂山を越えて、近江へとやって来た作者がそこで旅寝の場所を探すのであるが、その部分である四句目と五句目の表現には、次のような類歌を見ることができ、大伴の御津に船乗り漕ぎ出てはいづれの島に廬せむ我

十五―三五九三

十五に収められている遣新羅使歌群の「発つに臨む時に作る歌」という三首の中の一首である。これは、天平八年（七三六）のもので、旅路の夜の不安を歌うとされているこの三首にあり、前の歌が「海原に浮寝せむ夜は沖つ風いたく吹きそ妹もあらなくに」（三五九二）と、海上での宿りの不安を歌うのに対して、陸上での宿りの不安を歌うものと考

えられる。作者は明記されていないが、遣新羅使という公的な立場の官人の歌であることは確かであろう。しかしながら、この類歌と大きく異なっているのは、その「廬」する場所ではないだろうか。旅先での「廬」の具体的な歌い方をみていきたい。

⑬ 高島の阿戸白波は騒げども我れは家思ふ廬り悲しみ

七―一二三八

⑭ 河口の野辺に廬りて夜の経れば妹が手本し思ほゆるかも 家持

六―一〇二九

⑮ 梅の花散らす春雨いたく降る旅にや君が廬りせるらむ

十一―一九一八 春相聞

⑯ 宵に逢ひて朝面なみ名張にか日長く妹が廬りせりけむ 長皇子

一―一六〇

⑰ 舟泊ててかし振り立てり廬せむ名子江の浜辺過ぎかてぬかも

七―一一九〇

⑱ 玉藻刈る処女を過ぎて夏草の野島が崎に廬すわれは

十五―三六〇六（三一―三五〇の一本）

⑲ 大和には聞こえも行くか大我野の竹葉刈り敷き廬りせりとは

九―一六七七

⑳ 恋繋み慰めかねてひぐらしの鳴く島蔭に廬りするかも

十五―三六二〇

②秋田刈る仮廬を作り廬りしてあるらむ君を見むよしもがも

十一二三四八 秋相聞 (水田)

③鶴が音の聞こゆる田井に廬りしてわれ旅にありと妹に告げこそ

十一二三四九 秋相聞 (水田)

④秋田刈る旅の廬に時雨降りわが袖濡れぬ干す人なしに

十一二三三五 秋雑歌 (雨)

「廬」は、夜になってからいるべきところであるため、ことさら、家
が思いおこされる。それは、③の歌で明らかであろう。家持の④の歌は、
天平十二年、藤原広嗣の反乱後に聖武天皇が伊勢に行幸した時のもの。
ここで、家持は旅寝であることを「妹の手本」を恋しく思うことで感じ
るといふ。このように、具体的に共寝の相手の不在により、旅を意識す
るのは、⑤の歌も同様である。多くの旅が男性のものであるのに対し、

⑥の歌は、女性が「廬」していることを男性から歌っている。⑦、⑧の
ように、場所を歌うことのみで、都が歌われないものもあるが、多くは、
都との対比であろう。次の⑨の歌は、大宝元年の十月の持統天皇の紀伊
国行幸時のものである。この歌では、「廬」のわびしさを「竹葉刈り敷」

くとし、家での夜とは違うことを歌い、都へその様子を伝えたいといっ
て、都にいる相手との本来のありかたを求めているのである。こうした
表現は⑩の遣新羅使の歌も同様である。ここでの恋とは、都から離れ、
共寝ができないということから起こる心情に他ならない。旅に出た側で
はなく、待つ側からの歌は ⑤である。ここでも、自らの寂しさと共に、

共寝をすべき相手が仮の宿りで不安であることを歌うのである。また、
本来、存在すべき場所ではない所としての「廬」は②③の歌の刈り入
り時の田における「廬」というものもいられる。これは、ある程度固
定された場所であり、旅そのものとは、その場所自体の不安という点で
は異なっているが、ここでは、家の対であり、家郷への思いという点
では同じであるといつてよい。

こうした、旅という状況による別離は「廬する」という表現をとるが、
それは、夜という時間のものであり、背後には、一対の相手との共寝が
あり、安定した共寝の対極であるが故に、わびしさを強く歌うことにな
るのではないだろうか。坂上郎女は、畿内を出たという不安を「いづれ
の野辺」という定まらない未知の場所に「廬」と歌うことでさらに
強めている。実体として、旅の宿りにふさわしい場所に廬をむすんだと
しても、それは、旅という状況である限り、歌の表現では、不安をかき
立てるものであり、都との距離を思う時、共寝への希求が高まるものに
他ならない。

四

問題としている歌について、伊藤博氏は、「これは、今夜の宿りを気
遣う心を、遠く鄙に旅する人の心細さを表す羈旅歌の発想でうたったの
であろう」とされ、「一種の文学的虚構」とされている。題詞では、「晩
頭に帰り来たりて」と記されているので、この表現は、実体ではなく、
旅の歌そのものに対する坂上郎女の意識の現れである。

旅とは、坂上郎女の時代、すでに言われているとおり、多くは、官人である男性のものであった。それは、望むと望まざるに関わらず、官人としての立场上、行かなければいけないものであり、半ば強制的に、都にいる愛しい人と別れさせられるという心情に至らせるといつてもよいであろう。梶川信行氏は、旅の歌の位相ということを考える中で「多分に恋歌の発想と共通の基盤を持っている」とされ、その原因は、「『家』との距離感であり、『妹』にあえないこと」と論じられる。旅は、たとえ、多くの人と共にいても、一对の相手といないために、独り寝を意識するのである。坂上郎女にとって、実体的には、多くの人とともにしている旅であっても、こうした、万葉集の表現の中に置いた時、それは、官人が独り寝を嘆くものと、同じレベルのものとなる。ここでは、あえて、女性の側からの表現をつかわないことで、多くの男性の旅の歌と重ねようとしたものと思われる。それこそが、坂上郎女にとっての旅という概念といえよう。都人にとつての畿内から外へ出ることの不安、そして、独り寝。坂上郎女には、近江という地に至つて見た景ではなく、都から、そこまでの距離が重要なのであった。こうしてみる限り、都人の共通の認識としての旅の歌がこの歌ではなかったのだろうか。決して、新しい表現ではなく、個性がみとめられるものでもないが、それは、歌の表現の上で敢えて、彼女が志向したものである。男性の官人たちの旅の歌としての共通理解がつくりあげた型に入れ込むことで、「旅」というものを取り出し、その固定された背後関係をはずすことによつて、「旅」というものを、場所の移動として歌いえたというべきであろう。

中西進氏は、坂上郎女について、男性の歌の世界である「旅」の歌も

歌っていることから、男性の歌と女性の歌との橋渡しをしているとされ、こうしたあり方が『土佐日記』へとつながると論じられる。自らの、女性としては珍しい体験の中で、その実体をそのまま歌うことなく、あくまで、歌の表現の共通理解をもととして、歌の世界を広げていったというのが、坂上郎女の歌い方である。そして、それは、中西氏も論じられるように、男性の歌、女性の歌のパターンを超えていく。こうしたあり方は、やがて家持へと継承され、女性中心の表現世界であつた恋歌の広がりを見るのである。

注

①坂上郎女の大宰府下向については、①女性としての日常的な世話、養育②一族の「妻」(家刀自)としての役割、③祭祀的なものという説があり、決定は見えていない。

②天平二年(七三〇)。旅人が十二月に上京するのに先立つての上京である。

③このあたりのことは、拙稿で詳述した。「千重の一重も慰めなくに」『大伴坂上郎女の研究』

④この歌についても、すでに拙稿で論じている。註三に同じ。

⑤それぞれの歌は次の通り。

妹が目を始見の崎の秋萩はこの月ごろは散りこすなゆめ 八一二五六〇

吉名張の猪養の山に伏す鹿の婦呼ぶ声を聞くが羨しさ 八一二五六一

隠口の泊瀬の山は色つきぬ時雨の雨は降りにつらしも 八一二五九三

⑥万葉集においてはこの表記のほかは「安布左可山」(十五―三七六二、中臣宅守の歌)を見るのみであり、本文の表記上は、後世の「逢坂山」をみることは出来ない。

⑦始めて「逢坂山」と表記されるのは古今集である。

逢坂にて人を別れけめ時によめる

逢坂の関しまさしきものならば開かず別るる君をとどめよ

八一三七四 離別

難波万雄

⑧宅守は天平十一年(七三九)ごろ越前に配流されたとされる。越前へ

の行程では、まず、「相坂山」をこえて近江へと入る。

⑨孝徳紀 大化二年正月の詔

⑩この長歌の反歌は「天地を嘆き乞ひ祈み幸くあらばまた還り見む志賀の韓崎」であるが、この歌については、左註で「ただ、この短歌は、

或る書に云はく『穂積朝臣老の佐渡に配さえし時に作れる歌』といへ

り」と記している。この配流は養老六年(七二二)のことである。

⑪この歌は、壬申の乱のおりの古歌謡と考えられている。又、内容から

「童話」と考える説もある。(『万葉集 全訳注』)

⑫この歌の題詞は「十二庚辰の冬十月に、大宰の少式藤原朝臣広嗣の謀

反して軍を発せるに依りて、伊勢国に幸しし時に、河口の行宮にして

内舍人大伴宿称家持の作れる歌一首」とある。この「河口」は現在の

三重県一志郡白山街川口とされている。

⑬「万葉集釈註」の一〇一七歌の註。

⑭「旅の歌」『旅と異郷』古代文学講座5

⑮「天平の女たち」『万葉史の研究』

『万葉集』の本文は『万葉集全訳注 原文付』(講談社)による。

『日本書紀』の本文は『日本古典文学大系』(岩波書店)による。